

## 地の思想の發達と三乘共通の十地

平川 彰

### 一 問題の所在

大乘佛教の起源を考へる場合、これまでの學界の通説としては、大乘は大衆部から發達したと見るのが一般の説である。しかし一の教理について、仔細に吟味してみると、必ずしもそうではない。いまこの「共の十地説」の發展についてみるも、これは有部の教理と關係が深いのである。共の十地説が有部説と關係が深いことは、すでに諸學者<sup>(1)</sup>によつて指摘せられてゐることであつて、今さらとり立てて言うこともなからうが、しかし具體的な資料にもとずいて、兩者の關係を論證した研究は見當らないようであるから、いまは具體的な資料を擧げて、この十地説の發展を明らかにしたい。

十地説については、共の十地のほかに、不共の十地説がある。これは「但菩薩地」ともいわれ、大乘菩薩独自の修行の階位である。不共の十地説については、その原型がマハーヴァスツに見られる。そしてこの教理が發展して、華嚴の十地

説が成立したと見られている。とくに水野弘元博士<sup>(2)</sup>は、諸部派の佛傳類の中に十地の階位を示す用語が散發的に用いられている例を多く示された。そして諸部派の佛傳類の中で、佛陀の菩薩時代の修行の進展を段階づける思想として、十地の考えがおこつたことを論證された。これは釋迦菩薩のみの修行の階位として説かれた十地説であつたが、これがさらに一般化されて、菩薩一般の修行の階位としての十地説に發展した。この十地説が、マハーヴァスツの中に保存されてゐるのである。しかしこの場合の菩薩は、佛陀の前生としての菩薩であつて、すでに成佛した佛陀の前生を逆觀して、考察せられてゐる菩薩である。したがつて般若經などで考へてゐる菩薩とは、意味がことなる。般若經の菩薩は、まだ成佛してゐない菩薩である。たとえ成佛の記別をうけてゐるとしても、しかしいつ成佛できるか、未來はさだかでない。むしろ衆生救済のために無限に輪廻の世界にとどまろうと決心してゐる菩薩である。成佛を期待した修行は、菩薩の修行にならない

とすら言われている。

これにたいして佛傳のとく菩薩は、すでに成佛した佛陀の前世の因行を示すために考えられている菩薩である。したがって兩者のあいだには、同じ菩薩という用語を用いながらも、意味内容に本質的なちがひがある。

ともかく水野博士は、マハーヴァスツなどにまとめられた十地の思想が、大乘佛敎によつて採用せられ、はじめは「十住」説としてまとめられたが、のちに華嚴經の十地説として完成したと推定された。以上の水野博士の研究においては、不共の十地説は、部派佛敎の佛傳作者たちのあいだで發達した十地説と關係の深いことが明らかにされている。これはまことに妥當な見解であると思うが、ともかく現存資料としては、大衆部系のマハーヴァスツに十地説が説かれている以上、大乘と大衆部とは關係が深いと見る從來の説に、一つの論據をあたえるものといふことができるであらう。しかし實際には、たんに大衆部だけでなしに、ひろく諸部派の共有財産としての佛傳類の中で、十地の階位が成熟していつたと見るべきものであらう。

佛傳では、佛陀の前身での修行の階位を考えたのであるから、最初から十地説は、聲聞乘・緣覺乘とは結合していなかったのである。佛陀の修行の偉大性は、聲聞や緣覺と比較して示しうるものではないから、それらとの對比において、佛

陀の修行の階位を立てないのである。したがつてこの十地説は、聲聞乘や緣覺乘と結合する契機を、最初からもつていなかったのである。ゆえにこれが、小乘の佛傳作者たちによつて考えられたにもかかわらず、純粹に菩薩の修行の階位として發展したのであり、またそれが可能であつたのである。

したがつてこの十地説の發生は、その原初形態においては、大乘佛敎の思想的獨立とは無關係であつたと見なければならぬ。そして大乘佛敎が發生したあとに、大乘教徒によつて、これが採用されたにすぎないのである。しかし大乘がこれを採用したあとには、初地よりも低い段階に聲聞や緣覺を位置づけることなどが行われたから、小乘佛敎と對立的な考えが現われてくるのである。しかしこれは、不共の十地説發生の最初の發想ではなかつたのである。これに比較すれば、聲聞乘や緣覺乘をふくむ「共の十地」の説は、明らかに大乘教徒がはじめて作つたものである。大乘教徒が聲聞乘の敎理をうちに取りこんで、獨自の見識にもとずいて作つたものである。聲聞地、獨覺地の上に、菩薩地、佛地をおくのであるから、明らかにこれは、菩薩乘の敎理の優越性を主張せんがための操作である。聲聞地や獨覺地を除いては、共の十地が成立しない點からも、このことは明らかである。

この三乘共の十地説が出てくる最も古い文獻は、小品般若であらう。このことは、一般にこれまでの學者の認めるところ

ろである。大品般若には二ヶ所に共の十地説が説かれてゐる。一つは發趣品第二十に「菩薩摩訶薩はこの十地の中に住して、方便力をもつての故に、六波羅蜜を行じ、四念處、ないし十八不共法を行じ、乾慧地・性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已作地・辟支佛地・菩薩地を過ぐ。是のごとき九地を過ぎ、佛地に住す。これを菩薩の十地となす」と述べてゐる。ここに十地の名目が挙げられてゐる。もう一つは深奥品第五七に「この中、菩薩摩訶薩は初發意より般若波羅蜜を行じて、十地を具足し、阿耨多羅三藐三菩提を得。（中略）佛言わく、菩薩摩訶薩は、乾慧地・性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已作地・辟支佛地・菩薩地・佛地を是足す。是の地を是足して、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」とあり、ここに十地を挙げている。

その挙げ方に關しては、大品般若系の光讚般若・放光般若・大品般若・大般若の第二會・第三會、さらにチベット訳、梵本等のあいだに若干のちがひがあり、ことにダットの出版した梵文二萬五千頌般若では、最初の乾慧地を落とし、性地 *gotra-bhumi* からはじめづゐる。そして已作地 *kṛtāvībh.* のつぎに聲聞地 *śāvaka-bh.* を加えて十地を組織してゐる。しかしともかくそれらを「十地」と呼んでおり、十地を枚舉している點では一致している。もつとも光讚般若では、十地の名稱が訳文の上に完備してゐないようである。しかし光讚

般若には「是れを菩薩摩訶薩の第十行住となす」と言つてゐるから、原典には十地の名稱が完備してゐたと見てよからう。訳の拙劣なるためか、あるいはその後の寫誤のために、十地の名稱が不足するにいたつたのであらう。しかしここには十地の内容の研究が目的ではないから、この點については、立入つた考察はひかえる。

したがつて共の十地は、大乘經典としては、大品般若系統において始めて現れたものであり、おそらく大品般若を傳持してゐた人々によつて、十地として組織されたものである。しかし般若教徒が十地を組織するにあつては、部派佛敎の敎理を利用したことは、十地の内容から見ても明らかである。とくに初地から七地までが、聲聞のアピダルマの修行の階位と合致することは、智度論の十地の説明より見ても明らかであり、また現代の學者の一般に承認するところである。

もつとも聲聞菩提・獨覺菩提・無上菩提の「三種菩提」や、聲聞・獨覺・菩薩の「三乘」の思想は、すでに部派佛敎で成立してゐたものである。このことは婆沙論や俱舍論などに説かれ、また *Divyāvadāna* や根本有部律などにも説かれており、修行にこの三種の道のあることは、部派佛敎ですでに確立してゐたと見てよいであらう。しかしこの場合の無上菩提は、佛陀のみの悟りを指すのであり、般若經などで説く菩薩乘とは意味が異ると見るべきであらう。

## 二 地の種々相

心所法と地 地 bhūmi の考へは、佛教では古くから存在していた。大地は他のものをせる土臺となつており、最も安定した場所であるが、心についても、精神現象の活動する「心地」が考えられる。

たとえば「善心」という心の領域には、善心を形成するための種々の心理作用が活動する。善心を形成するためにはたらく心理作用は、特定の若干の心理作用に限られている。もしこれらの心理作用が決定していなければ、いろいろな場合に現れる善心が、つねに同性質の善心であると決定することはできないであろう。このように善心を形成する心理作用が決定しているとすれば、これを逆に言えば、善心を形成する心理作用の活動するために、特定の心理的な場所、土臺が必要であるということになる。この土臺が、それらの心理作用を呼びおこした活動せしめるのである。この心理的土臺には、善心を形成する心理作用のみが活動するのであり、不善心等を形成する心理作用は、この心理的土臺には活動することができないという意味である。すなわちこの土臺は、善心を形成する心理作用のみを活動せしめる力がそなわつていてという意味である。その意味で、この土臺は、善の心理作用の活動するための「安定した場所」であると言つてよい。か

かる場所が、心理的な地として考えられることになる。このように善心や不善心を成立させるために、それぞれ独自の心理的土臺が想定されねばならない。これが「大善地」「大不善地」等の地である。これらの「地」は、特定の心理作用の活動する安定した領域である。そのためにこれらが「地」と呼ばれたのであろう。

このような心理作用の活動する土臺としての地の思想は、その發生は古くない。そしてつばら説一切有部で研究し、考察せられたようである。有部の論書としては、界身足論に大地法・大煩惱地法・小煩惱地法等の地が説かれている。これが、心所法の地を考える最初の文献のごとくである。さらに品類足論になると、以上の三地に大善地法が加えられて、四地になつている。さらに大毘婆沙論になると、大不善地法が説かれ、五地となつている。しかしこれらの論書には、心所法としては、以上の地に属しない心所が、なお外にも挙げられており、さらに、それぞれの地に属する心所法の枚擧の仕方や名稱も、諸論書のあいだに若干のちがひがある。ともかく五地の分類は、その後の有部の論書に受けつがれ、俱舍論にいたつて確定している。俱舍論には大地法 (mahabhūmika) 十法、大善地法 (kusāla-mahabhūmika) 十法、大煩惱地法 (kleśa-mahabhūmika) 六法、大不善地法 (akusāla-mahabhūmika) 二法、小煩惱地法 (paritā-kleśabhūmika)

十法が擧げられている。なおこのほかに、俱舍論には不定法が擧げられている。しかし俱舍論では、それらは、「不定地法」というごとく、「地」とは呼ばれていないようである。けだし不定法は、活動する場所が一定していかないという意味であるから、それらのために特定の地があるということは、理解しがたいことだからである。

心所法を地においてとらえる研究は、もつばら有部で行われたようである。その理由は、心所法を別體として認めない部派では、それらの活動するための「地」を想定することも不可能だからであろう。そのために俱舍論には、經量部系の人<sup>(1)</sup>が、大地法を否定したことを傳えている。すなわち俱舍論には、十二緣起の受と觸の關係について論争を述べるにさいし、經部師が大地法を否定したことを述べている。それにたいして有部の側から「若ししからは、何を大地法の義と名ずくるや」と問いを起している。これにたいして經部師は「謂わく三地あり。一には有尋有伺地、二には無尋唯伺地、三には無尋無伺地なり。また三地あり、一には善地、二には不善地、三には無記地なり。また三地あり、一には學地、二には無學地、三には非學非無學地なり。若し法あり、前の諸地において、皆有るを大地法と名ずく。若し法あり、ただ法の善地の中においてのみ有るを、大善地法と名ずく。若し法あり、ただ諸の染地の中のみ有るを、大煩惱地法と名ずく。云々」

と答えている。

ここには經量部のいう三地が三種類擧げられている。最初の有尋有伺地等の三地は、禪定における地であり、これは部派佛教で一般に認めている地である。この點については後述する。つぎの善地等の三地は、有部が心所法を地で分類する考え方と共通點が見られる。第三の學地等の三地は、証悟の段階としての地であり、いま問題にしている十地の考えと同じ發想に屬するものである。この點についても後述する。ともかく經量部は、以上の諸地に、すべてに存在する心所を大地法となすのであるから、これは有部の大地法の解釋とことなる。しかしつぎの大善地法や大煩惱地法の解釋は、有部の解釋と似た點もあるが、一般に經量部は、心所が心から別にあることを認めなかつたといわれ、あるいは受・想・思の三つの心所のみを別體として認め、他の心所の存在を否定したとも傳えられるので、細かな點は明らかでない。

このことは、經量部の説を加味したと思われる大乘の唯識説が、有部の心所説をほとんどそのまま吸収しながらも、これらを「六位の心所」としてまとめ、「地」によつて分類していないことをあわせ考へるべきであろう。すなわち唯識<sup>(2)</sup>三十頌によれば、前六識は「遍行と、別境と、善と、煩惱と、隨煩惱との心所と相應する」と説き、ついで遍行の心所五法、別境の心所五法、善の心所十一法、煩惱の心所六法、隨煩惱

の心所二十法をあげている。以上が五位の心所であるが、なおこのほかに悪作・睡眠・尋・伺の四法がある。漢訳成唯識論では、これらの四法を不定の心所と明言しているので、「六位の心所」となる。しかし梵本唯識三十頌では、これらの四法には染汚の場合と不染汚の場合があるというのみで、不定と明言していない。ゆえに梵本には「六位」という用語も用いられていない。ともかく唯識説が心所法を「地」においてとらえていないことは、これで明らかであろう。

さらにパーリ佛教でも、心所法を地によつてまとめられることをしなかつたようである。パーリの攝阿毘達磨義論 Abhidhammathasāṅgaha には、五十二の心所を、共一切心所七、雜心所六、不善心所十四、淨心所二五に分類しているが、しかしそれらの活動する地を考えていない。さらに有部と部派の異なる舍利弗阿毘曇などにも、この種の「地」の思想は見られない。この点から考えても、地の思想は有部と關係の深いことが考えられる。しかし煩惱を地において考える思想としては、勝鬘經に見られる「見一處住地・欲愛住地・色愛住地・有愛住地」の四住地の煩惱と、さらにその根據となる「無明住地」avidyārasabhūmi の煩惱がある。この考えは勝鬘經にはじめて現われ、その後の如來藏系統の思想にうけつがれてゆく考えである。特異な思想であるが、どこかの部派佛教につながるのかどうか、不明である。

地の思想の發達と三乘共通の十地（平川）

なお俱舍論には、心所法に關係のある地として、以上のほかに意地・意識地・六識地・異熟地などが説かれているが、詳しい研究は別の機會にゆずりたい。

禪定における地 上記、俱舍論に引用せられていた「有尋有伺地」等は、禪定における地である。禪定において地が區別されるのは、禪定には段階があるからである。低い禪定の段階から、高い段階に漸次すすんでゆくことができる。ある禪の境地に到達すると、その禪定の力の支持によつて、獨自の安定した精神の世界が展開する。たとえば初禪の段階に達すれば、初禪特有の安定した精神の世界が實現する。初禪には尋 vitarka・伺 vicāra・喜 prīti・樂 sukha・心一境性 (定 samādhi) の五つの心理作用が活動するという。初禪に入れば、必ずこれら五つの心理作用が活動するのであるから、逆にいえば、初禪はこれらの心理作用の活動する地(場所)であると考えることができる。さらにそこから二禪に飛躍すれば、初禪にあつた尋と伺とは消滅するという。そして内等淨 adhyātmasamprasāda・喜・樂・心一境性の四支が得られる。二禪にはいけば、尋・伺はかならず無くなつて、二禪特有の境地がひらける。これは安定した精神の状態である。その意味で、禪定の段階を地というのである。

さきに俱舍論に經量部の説として、有尋有伺地・無尋唯伺地・無尋無伺地の三地の説のあることを引用したが、かかる

三地は他の部派でもいうことである。たとえばパーリのヤマカ Yamaka に 'savitakka-savicāra-bhūmi 有尋有伺地・avitakka-vicāramātra-bh. 無尋唯伺地・avitakka-avicāra-bh. 無尋無伺地の三地が説かれている。これは上記の俱舍論の説に合致する。しかしパーリ系ではなおこのほかにダンマサンガニ Dhammasaṅgani には 'sukha-bhūmi 樂地・dukkha-bh. 苦地・adukkha-asukha-bh. 不苦不樂地・有尋有伺地・無尋唯伺地・無尋無伺地・pīti-bh. (喜地)・upekha-bh. (捨地)などが説かれている。さらに清淨道論には 'vivekaja-bhūmi (離生地)・pīṭisukha-bh. (喜樂地)・upekhasukha-bh. (捨樂地)・adukkha-asukha-bh. (不苦不樂地)の四地を説いて、これを四禪に當てている。

以上に説く諸地が、瑜伽論の説く十七地、すなわち1五識身相應地・2意地・3有尋有伺地・4無尋唯伺地・5無尋無伺地・6三摩呬多地・7非三摩呬多地・8有心地・6無心地・10聞所成地・11思所成地・12修所成地・13聲聞地・14獨覺地・15菩薩地・16有餘依地・17無餘依地と共通點のあることは一見して明らかである。

清淨道論では、このほかに「慧地」paññābhūmi を説いている。そして「蘊・處・界・根・諦・緣起などに分かれる法が、地なりと知るべし」と説明している。これらの法の分別理解は、慧を立場としてなされるので、慧を地として理解し

ているのである。

俱舍論の有部説では、禪定に關する地は「三界九地」にまとめられている。三界とは欲・色・無色の三界である。三界は輪廻によつて、善惡の業の果報として生れる場所としての意味もあるが、同時にその裏づけをなしているものが禪定である。すなわち色界天に生れるためには、四禪の實習に達することが必要であり、無色界天に生れるためには、四無色定の實習が必要である。そのために俱舍論には「九地とは即ち、欲界を一となし、靜慮、無色を八となす」と説明している。すなわち禪定の立場から見ると、欲界は散地であるから、一地にまとめる。色界には四禪があり、禪定の段階をなしているから、四地に分ける。無色界は四無色定に分かれているから、これを四地となし、合して九地となす。俱舍論にはなおこのほかに「若し無漏道は展轉相望して、一一皆、九地のために因となる。謂わく、未至定・靜慮中間・四本靜慮・三本無色なり」とあり、未至定と靜慮中間・四禪・三無色定を九地とする説を出している。これらの説は、すでに婆沙論にも見られるが、ここには禪定における地の研究が目的ではないから、これ以上の言及は省略したい。ただ禪定においても「地」の思想が成立していたことを示すにとどめたい。さきの有尋有伺地は初禪にあたり（未至定を加えてもよい）、無尋唯伺地は靜慮中間にあたり、無尋無伺地は二禪以上、四

無色定をふくむのである。

証悟の段階としての地 禪定の段階を地として考察することは、上述のごとく部派佛教で廣く行われていたから、その發生は、部派佛教のかなり古い時代にさかのぼりうるであろう。これは、心所法を地において區別する考え方よりも古いと見てよいであろう。しかし禪定の地の思想が、すでに原始佛教の時代から行われていたかどうかは、今はたしかめがたい。これにくらべれば、証悟の段階を地として把握することは、阿含經に用例が見られる。いまは、十地説の源流を考える前に、これらの地について一言しておきたい。

パーリの阿含經には、有學地 *sekha-dhūmi* と無學地 *asekha-dhūmi* との二地が説かれている。すなわちパーリ相應部第五卷に「この道理によるが故に、有學の比丘は有學地に住して、われは有學なりと知り、無學の比丘は無學地に住して、われは無學なりと知る」と述べている。この經典は、漢訳に相當經が見あたらないようであるが、ともかくここに有學地と無學地が説かれている。有學地は漢訳では「學地」と訳され、長阿含・雜阿含・增一阿含などの隨處に見られる。さらに諸部派の律藏には「學地認定の家」*sekhasammatam kulaṃ* が説かれている。原語は單に「學」*sekha* であつて、地はついていないが、これは、信者の淨信が増大して、証悟に達した場合、僧伽がその信者の家を、「學地に達した信者の

家」として、承認することを指すのである。學地に達した信者は、財物に執著する心がなくなるので、無制限に布施をするようになる。かかる家に、比丘たちがしばしば乞食に行けば、その信者の家は布施のために財物がなくなり、家族の生活も不可能になる。そのために、かかる信者の家にたいしては、僧伽は學地認定の羯磨をおこなつて、比丘たちが乞食に行くことを禁するのである。この規定は、律の波羅提木叉の波羅提提舍尼四條の中にふくまれている。諸律すべてこれを第三條に出している。(ただし僧祇律のみは第四條)。ゆえに律でこの條文のつくられた時代には、學地に達したと認定せられた信者が、現實に存在していたのである。學地の最初は「預流」であるが、預流に達することは、それほどむづかしくなかつたわけである。しかもこの規定が、律としてはあまり重要でない「波羅提提舍尼」にふくまれていることを注意してよからう。すなわち波羅提提舍尼の條文は、預流果に達することは非常に困難であるとするようになってきた時代よりも、はるかに以前に成立していたと見てよいのである。

このように學地のことは、諸部派の阿含や律に共通的に見られるから、おそらく部派分裂以前から考えられていたものと見てよいであろう。後世の教學に當はめれば、有學地は預流向から阿漢向までの七である。阿羅漢果は無學地である。さきに引用した俱舍論の經量部説では、學地・無學地・非學

非無學地の三地を立てているが、最後の非學非無學地は、凡夫地のことである。凡夫と有學と無學でもつて、修行者の區別がつくられる。

さらにミリンダ王問經にも、無學地・阿羅漢地 arahanta-bhūmi が説かれている。すなわち那先比丘の言として、「比丘はこれらの徳を受持し、これらの法の無缺圓滿・具足・受持よりして、無學地・阿羅漢地に趣入し、最勝最上なる地に趣入する」と述べている。ここに無學地が阿羅漢果であり、これが最上の地であることが示されている。

有部の薩婆多毘尼毘婆沙卷一に「無學地」が説かれており、後述することく婆沙論にもあり、また順正理論にも「學・無學地」が説かれている。

さらにパーリの相應部には、凡夫地 putujānabhūmi と善士地 sappurisa-bhūmi とが説かれている。すなわち「これらの法をかくの如く信じ、信解せば、彼を隨信行者と名づけ、正性決定に入り、善士地に入り、凡夫地をこえたりとなす」と述べている。これで見ると、凡夫地をこえることによつて善士地に入ることがわかる。したがつて善士地は有學地を意味するであろう。

漢訳阿含にも凡夫地は説かれている。雜阿含卷二には「若しこの法において、智慧をもつて思惟し、觀察し、忍を分別すれば、是れを隨信行と名づけ、超昇して、生を離れ、凡夫

地を越ゆ」と述べている。別訳雜阿含や增一阿含にも用例が見られる。

以上、パーリや漢訳の阿含には、凡夫地・有學地・無學地の三地が説かれている。これらを擴大すれば、其の十地の前七地になるのであるが、しかしパーリのアビダルマでは、そのような階位の擴大はなされなかつた。ただネットイパカラ Nettipakaraṇa に「見地」*dassanabhūmi* が説かれるのみのものである。聲聞の階位を地において發展せしめたのは、北方佛教であり、とくに有部であつた。パーリ佛教では、証悟の段階を立てるのに、「人施設」*Puggatapañatti* によつて分ける方向に進んだのである。パーリ論藏の人施設論には「一人」の項に五〇種の証語の人を出している。

### 三 十地と小乘佛教の階位

其の十地の階位は、般若教徒が組織したものであるが、しかしその前七地はすでに部派佛教で發達していた階位を、般若教徒がそのまま採用したものと見てよい。

其の十地説としては、*大品般若*に説かれるものが一般的であるが、それによると、十地とは、乾慧地・性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已作地・辟支佛地・菩薩地・佛地である。智度論の説明によつてこれを見ると、はじめの乾慧地と性地とは凡夫地である。つぎの八人地から已作地までの五地

が聲聞地である。そしてその上に辟支佛地・菩薩地・佛地が加上されているのである。智度論には、十地にはそれぞれ菩薩の地と聲聞の地との二様の説明がなされている。菩薩の修行の進展を十地に分ける場合には、聲聞の證語をそのまま當はめることはできないからである。しかしいまは菩薩の證悟は直接関係がないから、これを省略し、聲聞地の説明のみを考察することとする。

まず智度論によると、乾慧地では、觀佛三昧、不淨觀、慈悲觀、無常觀等を修し、智慧はあるが、しかし禪定を得ていない。すなわち智慧が禪定の水でうるおされていないので、乾慧地という説明されている。有部のアヒダルマで言えば、不淨觀・慈悲觀・無常觀等は、三賢位で修する修行である。三賢と四善根が、見道に入る前の段階である。智度論には、菩薩の立場からは、發心して順忍までを乾慧地という説明している。これも凡夫地である。

玄奘はこの乾慧地を大般若波羅蜜多經で「淨觀地」と訳している。これは翻譯名義大集に *suklavīdarsana-bhūmi* とあるのに相當するであろう。しかし羅什の譯した大品般若や智度論の原語も、これと同じであつたとは見難いであろう。この梵語には乾くという意味がないからである。ダットの出版した大品般若の梵本には、この語を缺いているために、これ以上のことは不明である。チベット譯二萬五千頌般若でも、

*dkar-po rnam-par mthob bahi sa* とあり、これは *suklavīdarsana-bhūmi* に相當し、玄奘譯に合する。しかし古譯を見ると、光讚般若の「十住品」では「寂然離見現入」とあるのが、これに相當し、放光般若では、「治地品」では「過滅淨地」とあるのがこれに相當し、しかし「甚深品」では「智地」とあるのが、これに相當するようである。ここでは十地として「智地・觀地、八輩觀地、薄地、離婬地、已辨地、辟支佛地、菩薩地、佛地」を擧げているが、これらを十地と見るためには、智地と觀地（これを性地にあてる）を分け、さらに八輩と觀地とを分ける必要がある。このように見る學者もあるが、さきの「治地品」では「過滅淨地・種性地・八地・見地・薄地・滅婬怒癡地・已作地・辟支佛地・菩薩地・佛地」と正確に十地を枚擧しているから、これを正しいと見た方がよいのではなからうか。そして「甚深品」の列名には、誤りがあると見た方がよくはなからうか。ともかくいずれにしても、初地の名稱は、大品般若の出す「乾慧地」とは異なるのである。ちなみに羅什譯では、大品般若の「發趣品」でも「深奥品」でも、あるいは大智度論でも、譯語はすべて同じであり、「乾慧地」となっている。ともかく、光讚・放光・大品・大般若（チベット譯をふくむ）と、初地の名稱が變化していることは、十地における初地の名稱がなかなか確定しなかつたことを示すものであろう。

つぎの性地については、さきの放光般若の「甚深品」の混亂を除けば、名稱については混亂はない。性地・種性地などと譯され、原語は *gotra* である。十地の一一の名稱については、性地以下は古くから確定していたものごとく、混亂は見られない。ただ光讚般若に十地の名稱が完備していないことと、チベット譯、梵本が「已作地」のつぎに「聲聞地」*śrāvaka-bhūmi* を挿入している點が異なるのみである。智度論によると性地は、聲聞の煖法より世間第一法までであるという。すなわちこれは、有部の教理の煖・頂・忍・世第一法の「四善根」に相當する。したがつて十地のうち乾慧地と性地とが、凡夫地にあたることは、以上の智度論の説明からも明らかである。

有部の教理によれば、世第一法は一刹那であつて、その直後に見道に入る。そして聖諦を現觀して、聖者の部類に入るのである。これが預流向である。智度論によれば第三の八人地 *asīmakā-bhūmi* とは、苦法忍より道比智忍までであるというから、これは明らかに見道十五心をさすのである。これらの用語も有部の法相である。道比智忍(道類智忍)のつぎは、道類智であり、これからが預流果である。ただし十地説で、この見道十五心(八忍七智)を、何故「八人地」というか、その理由は明らかでない。これは、有部の法相にはつながらないようである。これは、四双八輩の八人かとも思う

が、しかしそれでは預流向から阿羅漢果までの全部がふくまれることになり、見道十五心のみを八人地とする説に矛盾するであろう。しかしこの八人地の用語は、毘尼母經に出てくるものであり、有部系の論書には見當らないものである。

つぎの第四「見地」*darsanā-bhūmi* は、智度論に「はじめて聖果を得、いわゆる須陀洹果なり」と説明しているから、これが預流果に相當することは明らかである。すなわち預流果にいたつて、四諦の聖諦現觀が完成するのである。しかし有部で、見道・修道・無學道という場合の見道 *darsanāntāga* は預流向を指すのである。見道十五心であり、第十六心の道類智は修道にふくめられている。したがつてここで預流果を「見地」に配當するのは、有部の法相とは合わない點がある。むしろ八人地を、見地と名づけた方がよいのである。

第五の薄地 *tanu-bhūmi*; *tanu-bhūmi* とは、智度論に「あるいは須陀洹、あるいは斯陀含(一來)なり。欲界の九種の煩惱を分斷するが故に」と説明している。すなわちこの説では、預流と一來とが薄地に相當するわけである。ここでは、欲界九種の煩惱を分斷するといっているから、俱舍論のいう欲界九品の惑の若干を斷ずる意味であろう。俱舍論で言えば、欲界の惑の三・四品を斷ずれば「家家」になり、六品を斷ずれば一來果になるという。そしてこの一來果を「薄貪瞋癡」とも言うている。これは煩惱が薄くなるという意味であ

る。これを十誦律では「三毒薄者」と言っている。したがって第五の薄地は、この一來果に相當するわけである。

第六の離欲地 *virāga-bhūmi* は、智度論に「欲界等の貪欲・諸煩惱を離る。これを阿那含と名す」とある。これは不還果である。これは欲界九品の惑をすべて斷じた位である。それ故、欲界にたいする煩惱をはなれてしまふから、再び欲界にかえつてくることがない。故に不還というのである。そして命終のち上二界に生れ、そこにおいて必らず涅槃に入る。不還果が欲界の惑を離れた點で、これを離欲地 *virāga-bh.* と名すけたわけである。ここでは欲界の惑を「欲」のみで代表したわけである。さきに放光般若がこれを「滅婬怒癡地」と譯しているのは、これを詳しくしたものである。婬・怒・癡は、貪・瞋・癡の古譯である。

第七の已作地 *kṛtavi-bhūmi* は、智度論では「聲聞人が盡智無生智を得て、阿羅漢を得」と説明している。自己が煩惱を斷じたと自覺したのが盡智であり、再び輪廻の生存に入らないと自覺するのが無生智である。この考えは阿含以來あるが、その場合でもこれが阿羅漢の自覺とされている。したがって盡智無生智をもつて阿羅漢の自覺とみるのは、古くから確立していたと見てよい。

以上のごとく前七地は、有部の法相とよく合するのであるが、聲聞の階位を地によつて組織することは、すでにアピダ

ルマで行われていたのである。婆沙論や毘尼母經などに、かなりまとまつた説があるので、それを示すこととしたい。

#### 四 十地説成立の素材

妙音の三地説 悟りの階位を「地」の思想によつてまとめたものとして、まず注目すべきものは、大毘婆沙論に現われる尊者妙音の説である。婆沙論によると、「尊者妙音はかくの如きの説をなす。厭とは薄地をいう。離染とは離欲地をいう。解脱とは無學地をいうなり。涅槃とは地の果をいう」と述べている。「厭とは薄地」とは、三毒薄者は貪瞋癡の三毒がうすくなるので、欲界の生存を厭うようになる點を言うのであろう。これは一來果である。つぎの「離染とは離欲地」とは、欲界にたいする煩惱をはなれた位である。したがってこれは不還果に相當するわけである。ここに薄地と離欲地とが出ている。これは完成した十地説では、第五の薄地と第六の離欲地に相當する。第七の已作地は、ここでは無學地と呼ばれている。已作地も無學地ともに阿羅漢果をさすから、内容的には同じである。したがって妙音の説には、十地のうちの五・六・七の三地が出てくることになる。

迦多衍尼子の五地 これより一步すすんだ説は、迦多衍尼子の説である。婆沙論によると、彼は五地を説いていた。すなわち「尊者迦多衍尼子は、經の義に隨順して是の言をな

す。根律儀・戒律儀・無悔・歡喜・安樂・等持、これ修行地である。如實知見は見地である。厭はこれ薄地である。離染はこれ離欲地である。解脱はこれ無學地である。涅槃はこれ諸地の果である」と述べている。すなわちここに、修行地・見地・薄地、離欲地・無學地の五地が説かれている。ここでいう修行地は、根律儀・戒律儀等であるから、これらは凡夫地における修行をさすと見てよい。第二の見地は、十地説では第四におかれ、預流果を意味する。しかしここで「如實知見を見地」とするのは、單に預流果だけを指すのではなからう。預流向の「見道」もふくめていると見てよいのではなからうか。

十地説では見道を「八人地」として、別に立てるために、見地は預流果だけになつてしまふのである。しかし「見地」という名稱から見れば、聖諦現觀の十六心を指すと見る方が合理のごとく思われる。したがつて迦多衍尼子の「見地」の中には、八人地と見地の兩者がふくまれていると見てよいのではなからうか。それ以後の薄地・離欲地・無學地は、妙音の場合と同じである。

なお妙音や迦多衍尼子の「無學地」は、阿羅漢果と見て、已作地と同じと解することもできるが、しかし廣く言えば佛の悟りも、無學地にふくめうるものである。薩婆多毘尼毘婆沙には、「三寶を以つて言わば、無師の大智、及び無學地の

一切の功德、これを佛寶と謂う」と述べ、無學地をむしろ佛陀に歸している。そして「聲聞の學・無學の法是れを僧寶と名ずく」と述べている。すなわち聲聞の無學を僧寶にふくめ、無學地にふくめないのである。しかしここでは佛寶と僧寶とを分ける必要があつたから、このように分けているのであるが、しかし本來から言えば、無學地の中には聲聞の無學法もふくめて差支えないであらう。かく解するならば、無學地は、聲聞・獨覺・佛のすべての無學法をふくむことになり、十地説の已作地より廣いものになるわけである。

ともかく迦多衍尼子の五地は、十地の前七地に近いものと言えよう。すなわち五地のうちの修行地を、乾慧地と性地との二つにひらき、見地を、八人地と見地との二つに開けば、七地になるのである。

さらに有部系統においては、十誦律に階位に關する用語が見られる。十誦律には、提婆達多が惡象を放ち、佛陀を害せんとした。しかし佛陀は神通力によつて、その惡象を制禦し、そのとき佛陀の安危を心配して集つた人々に説法をしたという。そのとき教えを聞いた人々の中に「暖法者・頂法者・順道忍法者・三毒薄者・離欲者・世間第一法者を得る者あり、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得る者あり、聲聞乘の因縁を種える者あり、辟支佛乘の因縁を種える者あり、佛乘の因縁を種える者あり。云々」と述べている。これは得道者の類

型を示したものであり、階位を示したものではないが、しかし得道によつて階位が反顯されることになる。そしてここに三毒薄者・離欲者など、十地の階位と合致するものが見られる。しかし得道者の枚擧の順序が混亂しており、統一がない。なおここに聲聞乘・緣覺乘・佛乘のそれぞれに發趣した人のあることを示している點も注意してよからう。三乘に發趣する人のあることは、有部の論書では一般に認めていることである。

なお得道者の類型を考える場合には、舍利弗阿毘曇卷八の「人品」の最初に「凡夫人・非凡夫人・性人・聲聞人・菩薩人・緣覺人・正覺人、云々」と枚擧していることも考慮すべきであろう。これに關連してパーリ論藏の人施設論 Pugsaḍḍapaññatti に示される得道者の類型も考慮すべきであろう。

人施設論に示す五〇人と、舍利弗阿毘曇の出す七七人との間に共通點のあることは、すでに木村泰賢博士によつて明らかにされている。さきの「性人」Gurābhū のときは、十地の第二「性地」と關係があらう。パーリの人施設論の説明によれば、「性人 Pugsaḍḍo sotābhū とは、それらの法の等無間に聖法の出現あり、それらを具した人、これを性人といわれる」と説明している。これで見ると「性人」とは、悟りを得る前の凡夫の段階であるが、しかし聲聞の悟りを得るか、菩薩の悟りを得るか等の「獲得すべき聖法がすでに決定して

いる人」を意味するわけである。すなわち凡夫時代の修行の道がことなると、その異なる道によつて修行をすすめてゆくために、そこに「性」が形成されるわけである。その性にもとずいて、それぞれ異つた悟りが得られるわけである。この「性人」の解釋は、十地説の第二「性地」の意味に適用して、少しもさしつかえないであらう。「性地」を凡夫地の一つとする點も、意味がよく合する。おそらく關係があると見てもよいものであらう。尙このほかにも、人施設論の五十人や、舍利弗阿毘曇の七七人の中には、十地と關係のあるものも見られるが、いまは省略することとした。

以上の婆沙論の説では、迦多衍尼子の五地説がもつとも整つている。婆沙論の成立は二世紀ごろと推定されているから、必らずしも般若經より古いとはいえないであらう。しかしこれが傳説のごとく妙音や迦多衍尼子が實際に説いていたことを傳えているものと見れば、般若經よりも古いことにならう。もつとも婆沙論の異譯である舊毘婆沙では、「尊者瞿沙(妙音)この經を解している。如實知見は是れ見地と説く。厭は是れ薄地、無欲とは是れ無欲地、解脱とは是れ無學地、涅槃とは是れ諸陰の不生なり」と述べている。この内容で見ると、むしろ迦多衍尼子の説を妙音に歸している。しかしここには修行地を缺いており、しかもこの舊婆沙では、この一説を出すのみで、これ以外に妙音の説を出して

いない。したがつて新舊の婆沙論は、この點においては合致しないのである。しかしともかくこれらの地を説いている點で合致しているのであり、おそらく婆沙論成立よりかなり以前から、有部宗内にこのような地に關する説が、説かれていたものであらう。しかも有部が、般若經から教相を攝取したとは考へがたい。當然その逆であつたと見るべきであらう。

**毘尼母經の六地説** しかし般若經の十地の組織にさらに近いものは、毘尼母經の説である。毘尼母經には二ヶ所に「地」が出てゐる。即ちその卷一に、具足戒を得ることを説明するところに「悟りを得れば、それが具足戒を受けたことになる」という説明がある。普通の比丘は十人僧伽で白四羯磨の作法をなすことによつて具足戒を受けるのであるが、しかし佛陀の在世には、佛陀から説法を聞いて、悟りを得れば、その證悟を得たことが、そのままその人の具足戒になるとなしている説がある。したがつてかかる人は、改めて具足戒の儀式をする必要がないという説である。これは、具足戒を受ける型の一つとして、他部派の律の註釋でも言うてゐることである。「見諦得」とか「證悟得」などと呼ばれるものである。しかし毘尼母經では、證悟に種々の段階を説くために、多くの階位を示すことになつた。それによると「また白業觀を能くする者も、亦受具と名づく。種性地を成就するが故に名づけて受具となす。云何が種性地と名づくるや。人あり、佛

の邊に在りて聽法し、身心懈らず、念念に成就す。此の心に因るが故に豁然として自ら悟り、須陀洹を得。須陀洹とは善法の種性なり。四果四向第八地・見諦地・薄地・離欲地・已作地・乃至、無師獨覺、皆、受具と名づく。六度を成就するも亦、受具と名づく。云々」と述べてゐる。

ここには、白業觀を得た者をつつ立て、つぎに種性地として、須陀洹を擧げている。これは、預流に入れば聲聞の種性が決定するからであらう。つぎに四果四向第八地・見諦地・薄地・離欲地・已作地が説かれてゐる。ここに示す四果四向第八地は、おそらく般若經の十地の八人地に當るものであらう。これは上記の有部説には説いていないものである。そして有部で無學地と言つてゐたものが、ここでは已作地になつており、これも般若經の十地の名稱と一致している。さらにその上に「無師獨覺」を言うから、これは獨覺地に當り、その上に「六度を成就するも亦、受具と名づく」と言つてゐるのは、菩薩地に當るわけである。しかし毘尼母經としては、この六度を成就するでもつて、大乘佛教の菩薩乘を示さんとしたものではなからう。ここでは、佛陀の因位の修行者としての菩薩を意味してゐるのであらう。ともかく毘尼母經のこの説では、聲聞地の上に獨覺・菩薩が附加されてゐる點に、有部の説よりも一步進んでゐることが明らかである。しかも最初の白業觀を乾慧地に比定し、つぎの種性地は性地に當ると

すれば、白業觀・種性地・八人地・見諦地・薄地・離欲地・已作地・獨覺・菩薩の九地が得られ、般若經の十地に近づくことにならう。

つぎに毘尼母經ではその卷八に、煩惱を斷ずるために種々の觀行をなすべきことを説くなかに、「若し行人、地中に住する時には、應さに六地を觀すべし、一には白骨觀地、二には性地、三には八人地、四には薄地、五には離欲地、六には已作地なり。是れを地に住すると名ずく」と述べている。ここには明白に「六地」と言っているから、六地の階位が組織されていたことを知る。この中で最初に擧げる白骨觀地は、さきの卷一のいう「白業觀」と同じであろう。これは俱舍論で言えは「五停心」の中に、「不淨觀」があり、そこで骨鎖觀をなすのに相當するであろう。この五停心と別相念住、總相念住の三が「三賢位」であり、般若經ではこれを乾慧地としていたのである。したがつて毘尼母經の白骨觀地は、般若經の十地の第一乾慧地に相當するわけである。第二の性地は毘尼母經卷一の「種性地」であり、これは般若經の十地の第二地と名稱も合致する。これは四善根の位であり、この二地が凡夫地である。しかし毘尼母經卷一では「種性地」とは「預流を得」と説明しているから、全くの凡夫地と見ていたのではないようである。この點は合致しない。むしろパーリ人施設論の「種性人」の解釋の方が、般若經に近いようである。

地の思想の發達と三乘共通の十地(平川)

第三の八人地も、般若經の第三地と名稱が合致している。これは毘尼母經卷一で「四果四向第八地」と言っているものに相當するであろうから、八人地とは四向四果の八種人から名稱を得たものかと思われる。

般若經の十地では、第四に見地があるが、毘尼母經卷八の六地説には、これが缺けている。しかし毘尼母經卷一には、第八地・見諦地・薄地とつづいていた。卷八の六地説で見諦地が除かれた理由は不明であるが、おそらくこれは、八人地の意味が明瞭でないためであろう。八人地があれば、見諦地は必要がないとも考えられる。妙音や迦多衍尼子の説で、見地のみを言つて、八人地を出さないのは、兩者にはかち合ひ點があつたであろうかと思われる。ともかく毘尼母經の六地説の、その後の薄地・離欲地・已作地等は、般若經の十地説の名稱と全く合致している。したがつてこの六地説に、見諦地を挿入すれば、般若經の十地説の前七地がそのまま成立するのである。

このように見てくると、毘尼母經の説が、般若經の十地説に最も近いと言ふことができる。しかもその卷一には、已作地の上に無師獨覺や菩薩を説いているから、聲聞地の上に辟支佛地や菩薩地・佛地を加上する思想的準備も、部派佛教の中でかなり熟していたと見てよからう。

しかし毘尼母經が大品般若より成立が古いということを、

三〇五

論證することは困難である。毘尼母經は失譯であつて、譯者不明であるが、内容からみて五世紀前半の譯出であらうと思われる。したがつて原典はもちろんそれ以前の成立であらうが、しかしその成立の上限は不明である。毘尼母經の所屬部派は確定説は存しない。しかし内容的には四分律と合致する點が多く、四分律系統の註釋と見うる點が多いのである。しかも四分律の所屬部派である法藏部が、種々の點において大乘佛敎と關係の深いことも、この點から注目すべき問題である。

なお翻譯名義大集第五〇に「聲聞地」*Śrāvaka bhūmayān* が擧げられるが、これは *Sūklavidaṛsana-bhūmi* (乾慧地、但しこれは淨觀地となすべきであらう) から第七の *ktāvi-bhūmi* (已作地) までを擧げている。これは大品般若の十地の名稱の前七地と全く同じである。それをここで「聲聞地」として擧げている點に、これが本來、聲聞乘で成立したものであることを示している。しかし翻譯名義大集は成立が新しいために、これでもつて直ちに、十地のうちの前七地がすでにアビダルマにおいて組織されていたと言ひ難い點がある。しかし婆沙論の妙音や迦多衍尼子の説、および毘尼母經の説などは、アビダルマ独自の組織と見てよいものである。したがつて十地の階位のうちかなりの部分が、すでにアビダルマで成立していたと見てよいものである。しかも見地・薄

地・離欲地・已作地等は、預流果等の四果の段階から發達したことは、内容の點からと、名稱の點からとから考えられる。

#### 四果の證悟と地

四果を得た者にたいする佛陀の授記は、

阿含經に型となつて述べられている。大體、つぎのごとき型のものが多い。第一の預流果に關しては、「佛は(つぎのごとく)記したまへり。彼の比丘は三結斷じ、須陀洹を得たり。惡道に墮せずして、必らず涅槃を得。極至七生、天人中に往返して、衆苦を盡すことを得と。」とある。パーリでは、「彼は三結盡きることにより、預流 *sotāpanna* となり、墮

法でないもの(三惡趣に墮しない)となり、正覺に趣向する」とある。これらには、預流とあり、預流果とはなつていないから、預流向をもふくむものと見てよい。ここでいう三結とは、見結、戒禁取結・疑結であるが、上記のパーリのは、四不壞淨を具足することによつて、預流を成就すると言つてゐる。これは俗人の場合の預流であるが、しかし見結を斷ずるとあるが、見結を斷ずるためには、四諦についての何程かの悟りが必要であらう。しかしともかくここには、「見地」ということは、明瞭には現れていない。しかし十地説では、これが八人地あるいは見地に相當するわけである。

つぎの一來については、「佛は(つぎのごとく)記したまへり。彼の比丘は三結盡き、三毒薄く、斯陀含を得。一たび是の世に來りて、苦際を盡すことを得と」とあり。パーリで

は、「彼は三結をつくすことにより、貪瞋癡うすくなり、一來となる。一度のみこの世に來りて、苦の邊際をなす」とある。漢譯で「三毒薄く」とある點が、パーリでは「貪瞋癡薄く rāga-dosa-mohānaṃ tanuttā」とあり、三毒とは貪瞋癡のごとびある。この「薄」tanuttāは、十地説の「薄地」tanu-bhūmi, tanu-bh.)と同じ用語であり、薄地の原語がその最初は、ここに由來することは容易に推定しうる。それは、今まで見てきた薄地の内容から見て、論議のないところである。

つぎの不還果については、「佛は(つぎのごとく)記したまへり。彼の比丘は阿那含を得、五下結盡き、便ち天上において般涅槃し、是の間に還らず」とある。パーリでは「彼は五下分結盡きるにより、化生者となり、そこにおいて般涅槃し、その世界より還らざるものとなる」とある。五下分結とは、貪・瞋・身見・戒取見・疑の五結である。これらの煩惱は、衆生を欲界に結びつけるものである。不還は、これらの煩惱を斷ずるから、死して上二界に生れ、欲界に還らざるものとなる。それ故に「不還」と呼ばれるのであるが、十地説ではこれは「離欲地」vitāraṅga-bhūmiと呼ばれ、貪 rāga を離れることだけが言われている。しかしこの貪でもつて、欲界の煩惱を代表させているものと見てよからう。しかしパーリの阿含經では vitāraṅga は、不還よりもむしろ阿羅漢の屬性を

示すとき用いられている。

つぎの阿羅漢は、佛は(つぎのごとく)記したまへり。彼の比丘は阿羅漢を得、我が生はずで盡き、梵行すでに立ち、所作すでに辨す。自ら證をなしたりと知ると」とある。パーリでは「彼は諸漏盡くるにより、無漏の心解脱・慧解脱を、現法において自ら證知し、現證し、具足して住す」とある。漢譯には「所作已辨」とあるが、パーリにはこれはない。しかし阿羅漢の特徴として「所作已辨」katakaraṇīya ということは、漢巴の阿含經で一般に定説となつてゐる。十地の第七已作地は kṛtavi-bhūmi であるが、この kṛtavin は、さきの katakaraṇīya や kakkīca などと同じ意味であり、阿羅漢を示すのに、よく用いられる言葉である。たとえ「いかなる比丘でも、阿羅漢であり、なすべきことを作しおわり kṛtavi 諸漏を盡し、最後身となれる彼が、「私は語る」と言うべきであろうか」などと用いられている。この kṛtavi が kṛtavin である。したがつて kṛtavin が阿羅漢を示すことは、パーリの用例から明らかである。

以上のごとく阿含經において、四果の證悟を示す定型句と、十地中の聲聞地とのあいだには若干のつながりが認められるのである。したがつて聲聞地の階位は、その源流を四果の階位に發すると言ふこともできるであろう。しかしさきにも述べたごとく、パーリ佛敎ではこれを「地」において組織する

ことをしなかつたのである。それは主として有部等の北方佛教でなされたのである。(文部省科學研究費綜合研究成果の一部)本論文が頁數を超過したのは、執筆を中止された人が多く、ために第二号の頁數が減り、文部省への責任頁數を満し得なくなつたため、それをうめるためにとられた措置である。

- 1 久野芳隆「菩薩十地思想の起源、開展、及び内容」(荻原教授還曆記念論文集)七四—一二三頁)。宮本正尊『大乘と小乘』五七一頁以下。山田龍城『大乘佛教研究序説』二七四頁以下。
- 2 水野弘元「大乘經典の性格」(宮本正尊編『大乘佛教の成立史的研究』二八一頁)。

- 3 大品般若卷六、大正八、二五九下。光讚般若卷四、大正八、一九八下—九上。放光般若卷四、大正八、二九下。大般若第二會、卷四一六、大正七、八八下。影印北京版西藏大藏經一八卷<sup>9</sup>、一四六頁四—四。N. Dutī, *Pañcaviṃśatisāhāsika-Prajāparāmitā* p. 225.
- 4 大品般若卷一七、大正八、三四六中。放光般若卷一三、大正八、九一中。大般若第二會、大正七、二七三中。大般若第三會、大正七、四九七中、六三九上。大般若初會、大正六、六九〇中。山田龍城、前引書二七二頁に詳しく典據を出してゐる。

- 5 註2に擧げるチベット譯二萬五千頌般若では、*dkar-po ram-par mthoh bahi sa* (淨觀地)・*rigs kyi sa* (性地)・*brag-yad-pahi sa* (八人地)・*mthoh-pahi sa* (見地)・*bsrabs-pahi sa* (薄地)・*hdod-chags dan bral pahi sa* (離欲地)・*byas brtogs-pahi sa* (已作地)・*nan-thos-kyi sa* (聲聞地)・*ran-sans-rgyas-kyi sa* (獨覺地)・*byan-chus-sems-dpahi sa* (菩薩地)

の十地を擧げる。すなわち第八「聲聞地」を入れ、第十「佛地」を缺いている。

- 6 註2に擧げた梵本二萬五千頌般若では 1 *gotra-bhūmi*, 2 *aśīmanaka-bh.*, 3 *darśana-bh.*, 4 *tanu-bh.*, 5 *vyārāga-bh.*, 6 *kṛtāvi-bh.*, 7 *śrāvaka-bh.*, 8 *pratyekabuddha-bh.*, 9 *bodhisattva-bh.*, 10 *buddha-bh.* を擧げる。すなわち第七に聲聞地を擧げる點では、チベット譯に合するが、第一の淨觀地を除いて、第十「佛地」を入れる。漢譯諸系統は「聲聞地」を入れないで十地をつくるから、第一に淨觀地(乾慧地)を入れ、第十に佛地を加えるのである。

- 7 光讚般若卷七、大正八、一九八下—九上。
- 8 大智度論卷七二、大正二五、五八六上。
- 9 界身足論卷上、大正二六、六一四中。
- 10 品類足論卷二、大正二六、六九八中。
- 11 大毘婆沙論卷四二、大正二七、二二〇上中。
- 12 心所法の組織の成立に關しては、勝又俊教「佛教における心識說の研究」三六〇頁以下に詳しい研究がある。
- 13 俱舍論卷四、大正二九、一九上。なおこの梵語については、*Yāsomīra*, *Abhidharmakośavyākhyā* p. 131-2 による。
- 14 俱舍論卷一〇、大正二九、五三中。
- 15 俱舍論では、この説を経量部の主張と明言してはいない。しかし俱舍論には、ここに「世尊は、まさに經の量に依るべしと言えり」と述べているから、經量部系の説と見てよいであろう。俱舍論卷一〇、大正二九、五三中。ただしヤシューミトラは、大徳シキリーラータ (*Bhadanta Śrīlāta*) の説となす。こ

- れは經量部系の論師である。Yasomitra, *Sphuṭārtha Abhidharmaśāstrakāvyaḥya* p. 307. 但し光記卷一〇、寶疏卷一〇は經部の説となす。大正四一、一七七上、大正同、六〇八中。山口・舟橋『俱舍論の原典解明、世間品』二八六頁註九。
- 16 順正理論卷一〇、大正二九、三四八中。部派佛教における心所の否定説については、勝又博士の前引書四〇一頁以下。水野弘元『バーリ佛教を中心とした佛教の心識論』二三三頁以下。
- 17 S. Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi* p. 25 ff.
- 18 『新導成唯識論』卷五、二一五頁。
- 19 S. Lévi, *ibid.* p. 32. *ff.* 30, 31. 宇井伯壽『安慧護法唯識三十三頌釋論』九五頁。
- 20 南傳大藏經第六五卷所收『攝阿毘達磨義論』一〇頁以下。水野弘元、前引書二六二頁以下。
- 21 勝鬘師子吼一乘大方廣經、大正二二、二二〇上。
- 22 俱舍論卷二・卷二二、大正二九、八中・一一〇上中。但し梵文カリーカでは界品相當箇所では *manasi* とのみあるが、隨眠品相當箇所では *manovijñānābhūmikāh* である。V. V. Gokhale, *The Text of the Abhidharmakośakārikā of Vasubandhu* p. 77. v. 33, p. 92 v. 55.
- 23 俱舍論卷四、大正二九、二〇上。
- 24 俱舍論卷二二、大正二九、一一〇上。
- 25 俱舍論卷二八、大正二九、九四下。
- 26 俱舍論卷一〇、大正二九、五三中。
- 27 Yamaka vol. I. pp. 245, 257, 258. 南傳大藏經第四八卷上、四三二、四五八頁。
- 28 Dhammasaṅgani pp. 180, 182, 南傳大藏經第四五卷二六四、二六六頁。
- 29 Visuddhimagga, HOS. vol. 41. p. 323. 南傳大藏經第六三卷三一九頁。
- 30 瑜伽師地論卷一、大正三〇、二七九上。
- 31 Visuddhimagga 17, HOS. vol. 41. p. 410.
- 32 俱舍論卷六、大正二九、三一中。
- 33 俱舍論卷三、大正二九、一六中。
- 34 俱舍論卷六、大正二九、三二上。
- 35 婆沙論卷一六一、一六五、大正二七、八一七上。八三六頁。
- 36 SN. vol. 5. p. 229. 南傳大藏經第一六卷下、五七・五八頁。
- 37 長阿含卷四、大正一、二五中。雜阿含卷九、大正二、六三上。增一阿含卷二二、大正二、六六二上。その他。
- 38 「學地認定の家」(sekhasammatam kulam) Vinayapīṭaka vol. IV. p. 180. 南傳大藏經第二卷二九三頁。五分律卷一〇、大正二二、七二下。僧祇律卷二二、大正二二、三九八中。四分律卷一九、大正二二、六九七上。十誦律卷一九、大正二二、一三二上。V. Rosen, *Der Vinayavibhāṅga zur Bhikṣupātimokṣa der Sarvāstivādins*, S. 218, *śaikṣasammati*.
- 39 俱舍論卷一〇、大正二九、五三中。
- 40 Milindapaṭho p. 163. 南傳大藏經第五九卷上、三三二頁。
- 41 薩婆多毘尼毘婆沙卷一、大正二三、五〇六上。
- 42 婆沙論卷二八、大正二七、一四七中下。
- 43 順正理論卷五八・六七、大正二九、六六七下・七一〇上。
- 44 SN. vol. III, p. 226. 南傳大藏經第一四卷、三六三頁。

- 45 雜阿含卷二、大正二、一六上。なお大正二、二二四中。
- 46 別譯雜阿含七、大正二、四二五上、増一阿含卷一、大正二、五五二上中。
- 47 *Nettipakaraṇa* pp. 8, 14, 50.
- 48 大品般若卷六、大正八、二五九下。
- 49 大智度論卷七二、大正二五、五八五下—五八六上。
- 50 大般若波羅蜜多經卷四一六、大正七、八八下。
- 51 *Mahāvīyūpatī* No. 50, *Sāvakaḥumayāh*, 榑本八六頁、No. 1141.
- 52 *N. Dutt*, *ibid.* p. 225.
- 53 影印北京版西藏大藏經第一八卷一四六頁四—四。
- 54 光讚般若卷七、大正八、一九八下—一九九上。
- 55 放光般若卷四、大正八、二九中。
- 56 放光般若卷一三、大正八、九一中。
- 57 山田龍城『大乘佛教成立論序説』二七一頁。ただし博士がこの十地の名稱を「大品經」としておられるのは、何かの誤りであろう。これは上の放光經にふくめるべきであり、大品の「深奥品」は別に出すべきであろう。
- 58 大品般若卷六・一七、大正八、二五九下・三四六中。大智度論卷七二、大正二五、五八六上。
- 59 毘尼母經卷一・八、大正二四、八〇一中、八五〇中。
- 60 俱舍論卷二四、大正二九、一二四上。
- 61 十誦律卷三六、大正二三、二六三上。
- 62 放光般若卷四、大正八、二九中。
- 63 大毘婆沙論卷二八、大正二七、一四七中下。
- 64 同上。
- 65 薩婆多毘尼毘婆沙卷一、大正二三、五〇六上。
- 66 同上。
- 67 十誦律卷三六、大正二三、二六三上。
- 68 舍利弗阿毘曇卷八、大正二八、五四八下。
- 69 木村泰賢『阿毘達摩論の研究』一一七頁以下。
- 70 *Puggalapaññatti* p. 13, 南傳大藏經第四七卷三七六頁。なお舍利弗阿毘曇にも「性人」の説明がある。舍利弗阿毘曇卷八、大正二八、五八五上。
- 71 阿毘曇毘婆沙論卷一五、大正二八、一一四上。
- 72 拙著『律藏の研究』五七二頁以下参照。
- 73 毘尼母經卷一、大正二四、八〇一中。
- 74 毘尼母經卷八、大正二四、八五〇中。
- 75 拙著『律藏の研究』二六二頁参照。
- 76 *Mahāvīyūpatī* No. 50, 榑本八六頁。
- 77 四果を得た人々にたいする佛陀の授記は、型となつて、阿含經にはしばしば説かれている。その二三の例を示す。SN. vol. V, pp. 356-7, 南傳大藏經第一六卷下、二四二頁。長阿含卷二、五、大正一、一三上、三四中。中阿含卷一、一八、大正一、二四中下、五四五下。雜阿含卷三〇、大正二、二一七中下、増一阿含卷二〇、大正二、六五三中下。但しここでは最も整つてゐる十誦律の記述を、バリーと對照して示すことにした。十誦律卷一八、大正二三、一一九上。
- 78 SN. vol. I, p. 14, 南傳大藏經第一二卷二〇頁。